

書評 いかにしてフランス文学者は 文学の消滅に立ち向かうのか？

—水林章『公衆の誕生，文学の出現—ルソーの経験と現代』，
みすず書房，2003年4月を読む—

桑 瀬 章二郎

著者の水林章氏は誰もが認める現在の日本を代表する18世紀フランス文学研究者のひとりである。氏の関心の中心は18世紀という時代の文学史というよりもむしろ社会史や文化史にあるといえるが、分析の対象となるのは常に文学テキスト、とりわけルソーの著作である。氏の最初の著作である『幸福への意志』は、「文明化」の鍵概念をもとに、18世紀フランスの社会全体を読みなおそうとする壮大な意欲作であったが、広い領域を検討しながらも、著者の視線は決してルソーのテキストから離れることはなかった。副題が示すように、本書もまた極めて大きな主題—フランスにおける「公衆」概念の誕生過程—を扱いながら、その分析の軸となるのはやはり文学テキスト、とりわけルソーの自伝的著作、『告白』と『対話』である。精緻なテキスト分析から社会史的な概括へと向かい、長期的な文化史の見取り図を提示した後、極めて文学的なマイクロ・レクチュールへと立ち戻る著者の試みは、氏自身の言葉を借りれば、「文学」と「歴史」のあいだに位置するものであると言える。緻密なテキスト批評と大胆な社会史的解釈とを見事に交錯させる著者の力量には感服せざるをえない。『公衆の誕生，文学の出現』は、近年日本語で著された18世紀フランス文学に関する最も重要な書物のひとつである。

この作品はしたがってルソーのテキストについて、あるいは18世紀の知的風景についてさまざまな考察を呼び起こさずにはおかないのだが、評者がここで論じたいのは、そうした純粋に学術的な問題ではない。私が問題にしたいのは、